

「第三十八回庭野平和賞」贈呈式 名誉会長挨拶

公益財団法人庭野平和財団 名誉会長 庭野日鑛

「第三十八回庭野平和賞」の贈呈式に際し、ご挨拶を申し上げます。

この贈呈式は、昨年に引き続き、オンラインでの開催と致しました。受賞者をはじめ、関係する皆さまと直接お会いできないのは大変残念ですが、新型コロナウイルスの感染防止を考慮し、このような形にさせて頂きました。ご理解を頂きたいと思えます。

そして本日、ご多用にもかかわらず、こうして大勢の方々をご参加くださいました。あつく御礼を申し上げる次第でございます。

すでにご承知のように、今年度の「庭野平和賞」受賞者は、台湾の昭慧（チャオフェイ）法師でございます。選考にあられたサラ・ジョセフ委員長さまをはじめ、庭野平和賞委員会の皆さまに深く敬意を表し、お礼を申し上げますと存じます。

昭慧法師は、昨年受賞された韓国のポンニョン師に続いて、アジアから、また同じ仏教の僧侶として選出されました。受賞者は、毎回、地域性や宗教に偏りがないよう、慎重に検討されていますが、それでもなお、昭慧法師の功績が高く評価され、選出に至ったと聞いております。

只今、そうした贈呈理由を、サラ・ジョセフ委員長さまがお話してくださいました。ありがとうございました。

昭慧法師は、「一切衆生の救済」という仏教の根本精神に基づき、動物や自然を含めたあらゆる生命の保護をはじめ、死刑廃止、賭博の禁止などの社会運動を展開してこられました。

また、男女の違いによる差別や不利益をなくす活動、LGBT（性的少数者）の権利擁護などに積極的に取り組んでおられます。

ただいま私は、「一切衆生」という仏教の言葉を使いましたが、それは、「この世に生きているすべてのもの」「生きとし生けるもの」という意味であります。人間だけではなく、動物も、植物も、さらには無生物といわれるものさえも、それぞれを絶対の存在として、等しく尊ぶのが仏教の世界であります。

そして、一切の生きとし生けるものが、幸福であれ、安泰であれ、安樂であれと願われるのが、仏の大慈悲心にほかなりません。

このことを、もっと身近な言葉で表現するならば、「自分の周囲に一人でも不幸な人がいる限り、自分の幸福を手放しで喜んではいけない」ということでありましょう。昭慧法師は、そうしたすべてのいのちへの限りない慈悲の心で胸をいっばいにしながら、現実の問題に手を差し伸べておられるのに違いありません。

常に弱い立場にある動物への虐待防止を訴え、現実には、台湾での「野生動物保育法」と「動物保護法」の立法化に取り組み、成し遂げられたことは、一つの象徴と言えるのではないのでしょうか。

さらに昭慧法師は、「抜苦与楽」こそ、最も重要な仏教の実践であると説かれています。

「抜苦与楽」とは、文字通り、苦しみを取り除き、安樂を与えることです。それはそのまま、仏教の教える「慈悲」と言い換えることができます。

この「慈悲」の「慈」には、「人に安らぎを与えてあげたいと心から願う」という意味があります。「慈悲」の「悲」は、「相手の苦しみを取り去ってあげられたらいいなと心から願う」ということです。

単なる道徳的な規範にとどまらず、相手の喜びをわがことのように喜び、相手の苦しみを自分の苦しみと感じ取るという、深い宗教的精神から導き出されるものと申せましょう。

ご存知の方も多いと思いますが、仏教の根本をなす教えの一つに「縁起」の

法があります。「縁起」とは、「この世の一切の現象は、さまざまな原因や条件が関係し合って成立している」ということであります。

固定観念を捨てて、世の中を見ますと、地球上のすべてのものごとが、常に関連し合い、依存し合って、一つにつながっていることが分かってまいりません。

大宇宙に広がる星々も、太陽も月も、また、地球上に暮らすすべての生命も、「縁起」の法の如く、大きな調和の中に存在しています。

人間一人ひとりも、両親や祖先はもちろん、無数の人々や物、あるいは大自然の恩恵によって、いま、ここに、生かされているのであります。

そうしたありのままの相（すがた）を深く見つめますと、単なる「個人のいのち」という捉え方を超えて、すべてが「大いなる一つのいのち」であることを感じ取ることができます。仏教は、私たちの生きる世界を、このように大きくとらえます。

それは、自他一体、自他一如ということであり、すべてが兄弟姉妹であるという自覚です。だからこそ、すべてのいのちは等しく尊いのであり、他者の喜びは、わが喜びであり、他者の悲しみは、わが悲しみとなるのであります。

その一体感から生じる人間としてのごく自然な心情が、慈悲にほかなりません。

また、仏教の慈悲は、深い智慧に裏づけられたものです。日常の生活の中で、しばしば見られる自分本位で、情に流された愛情では、良かれと思って為した行いであっても、かえって不幸を招くことにもなりかねません。

こんな卑近な例があります。

ある人が、セミが殻から出ようとして懸命にもがいているのを見て、それを手伝ってあげたそうです。すると、セミは殻から容易に出たのですが、飛ぶ力が発揮できず、結局は死んでしまったといえます。セミは、殻から出ようと懸命にもがくことによって、飛ぶ力、生きる力を身につけていくのであります。

私自身、少年期を山村で暮らしましたが、殻から出ようとするセミはもちろん、殻から抜け出した直後のセミも、「触ってはいけない」とよく言われていました。これも、地域に根づいてきた一つの智慧でありましょう。

仏教は「智慧と慈悲」の宗教であるといわれます。「智慧即慈悲」「慈悲即智慧」ともいわれます。慈悲の心で相手に寄り添うと同時に、智慧に基づいて苦しみの根本原因を見だし、それぞれの状況に合った適切な行動をとっていくことが、最も大切な姿勢と申せましょう。

こうしたことは、頭では理解していても、なかなか行動が伴わないものです。しかし、昭慧法師は、どんなに困難な課題であっても、臆することなく声を上げ、自らが先頭に立って改善に取り組んでおられます。仏の慈悲と智慧を自ら体現されている昭慧法師に、心より敬意を表したいと存じます。

昭慧法師は、活動的で、芯の強い方ですが、同時に大変思慮深く、周りへの細やかな配慮を欠かさない方と伺っています。いつかお会いできる日を、本当に楽しみにしております。

本日の贈呈式を契機として、昭慧法師の願いと行動を、より多くの人々が共有することを期待し、またご健康で、これまで同様にご活躍くださることを祈念して、挨拶と致します。

ありがとうございました。